

第4回 宿舎事業を中心とした国立公園利用拠点の面的魅力向上検討会 議事要旨

1. 日 時：令和5年5月18日（木）09:30 - 12:30

2. 場 所：霞ヶ関ナレッジスクエア（オンライン会議併用）

3. 出席者：

（検討委員 ※50音順・敬称略）

加藤 久美（和歌山大学教授、武蔵野大学教授）

田中 明（高山市長）

友井 俊介（一般社団法人不動産協会リゾート事業委員会委員長、東急不動産株式会社ウェルネス事業ユニット ホテル・リゾート開発企画本部 執行役員本部長）

永原 聡子（Deneb株式会社 共同創業者・代表取締役、アトリエラパズ株式会社 代表取締役）

藤木 秀明（東洋大学大学院客員教授）

涌井 史郎（東京都市大学特別教授） 座長

（ゲストスピーカー ※敬称略）

高山 傑（一般社団法人 JARTA 代表理事、アジアエコツーリズムネットワーク（AEN）創設理事長）

寺田 直子（トラベルジャーナリスト）

青山 敦士（株式会社 海士 代表取締役）

芹澤 健一（アルパインツアーサービス株式会社 代表取締役社長）

（環境省）

奥田直久 自然環境局長、松本啓朗 大臣官房審議官、細川真宏 総務課長、則久雅司 国立公園課長、

萩原辰男 自然環境整備課長、岡野隆宏 国立公園利用推進室長、他

（関係省庁等）

加藤麻理子 観光庁自然資源活用推進室長 他

4. 議事概要

1) 開会挨拶

○開会挨拶（奥田自然環境局長）

2) ゲストスピーカープレゼンテーション

(1) 高山氏プレゼンテーション・質疑応答

【藤木委員】

- ・ プレゼンの中で言及されていた「オフグリッド」というのは、電気や通信等のインフラが、我々が普段住んでいる都市のような環境にない、という意味でよいか。

【高山氏】

- ・ 仰るとおりである。海外の国立公園においては、基本的にオフグリッドしかない。ソーラー発電を用いて電力を100%賄っていたり、浄化槽がなく、流水が無いため、固形のを燃やして蒸発させた水を利用したりという仕組み等になっている。

(2) 寺田氏プレゼンテーション・質疑応答

【加藤委員】

- ・ ①エコソサエティという話があり、10%~15%ほどが保全に還元されるという仕組みだと思うが、長期的なメンバーシップ、旅アトも関わるような仕組みになっているか。
- ・ ②このホテルが存在することによる地域社会への波及効果を実際に滞在して感じたか。

【寺田氏】

- ・ ①エコソサエティは、宿泊数にあわせてレベルがあり、宿泊者は次回宿泊時のアップグレード、宿泊料金の値引き等の特典が得られる。エクスプローラは企業としても、売り上げの一部をより多くの利益として地域に還元することが出来る。ビジネスの面もあると思うが、「何か貢献したい」という気持ちを持っている客層は、地域等に貢献しつつ特典も得られ、より「エクスプローラに行きたい」と思わせる巧い取り組みだと思う。
- ・ ②ガイドはほぼ地元の方で構成されている。若い方の雇用に繋がっていると同時に、世界中から富裕層の方が自分の地元に来て、自分達の文化や環境に興味を持ってくれることにより、地元に対する愛情・誇りを持つことが出来ている。さらに、エクスプローラは南米にいくつか宿を持っているので、世界の仕事に繋げることが出来るなど、次世代に繋がる仕組みになっている。今後は若い世代が自分達の場所を持ちつつ外に出て行く、そこでさらにブラッシュアップされ、優秀なプロのガイドやインタープリターとしての役割を担っていくようになるのではないか。

(3) 青山氏プレゼンテーション・質疑応答

【加藤委員】

- ・ 若い方をうまく育てているという印象を持っている。宿泊施設について説明があったが、島への来訪者数（入込客数）と宿泊者数のバランスはいかがか。

【青山氏】

- ・ 海士町は元々入込者数と宿泊者数は大きな乖離はなく、ほとんどの方が1泊される状態でここ10年ほど進んでいる。Entoが出来て丸2年ほどになるが、平均滞在泊数も増加傾向にあり、乖離は小さくなっている。一方で、隠岐諸島全体では入込者数と宿泊数の乖離は大きいと認識しており、全体でどのように宿泊数を増やしていくかが課題と感じている。

【永原委員】

- ・ Entoの魅力は、宿の運営だけでなく地域全体で面的にデスティネーションを運営していることだと理解している。長い時間をかけて地域の人々が協力してくれるようになったターニングポイント、決め手になった出来事はあるか。

【青山氏】

- ・ このプロジェクトは、8年前に前町長が構想した後、大反対から始まり、議会、商工会等、様々な団体に対する説明を繰り返した。反対の声が最も大きくなった段階で、住民、議員、区長等のステークホルダーに対し、運営会社としてプロジェクトの意義を出来るだけ丁寧に伝える説明会を開催した。説明会后に地域の方々から「自分達の知識が足りなかった」というお話と共に、応援していただける方が増えた。その前後にも様々な方に支援いただいたが、一つ分岐点を挙げるとしたらその時だったのではないかと感じている。

【藤木委員】

- ・ ホテルだけでなく行政や関係機関も含めたあらゆるレベルでの稠密なネットワークや連携、一言で

いうと「全部やる」という密度の高さと、「島まるごとホテル」に至るまでの、政策、観光、教育、交流、ジオパークといった取り組みの積み上げの中に、戦略的なプロジェクトとして Ento を開業したというのが重要なポイントかと思うがいかがか。

【青山氏】

- ・ 正直に申し上げれば、緻密に戦略を立ててやってきたかということそうではない。「やるからには繋げていこう」ということを続け、後付けで俯瞰してみたらこういう形になった。

【藤木委員】

- ・ 「後付け」でも、実は地元の中でこことここが組めば面白いことができるのに、ということがなかなかできない実態も少なくない中で、この取り組みは見事だと思っている。

【涌井座長】

- ・ 50 年前に海士町に訪れた際、コンサバティブな風土性を感じた。内向きになる方々をよくここまで広げていったという印象を持っており、ご苦労もあったと思う。

【青山氏】

- ・ 私自身も北海道の出身で、島に移り住んで 17 年ほどである。長い時間をかけて、地元の方々が、外の人を受け入れてでも前を向くんだという器の大きさがあったかと思う。

(4) 芹澤氏プレゼンテーション・質疑応答

3) 論点及び意見交換

○事務局から資料 1 に基づき、説明

- ・ 論点は以下 3 点
 1. 高付加価値な宿泊施設及びそこで提供する宿泊体験について
 2. モデル事業を行う場所の選定について【フェーズ 1】候補となる対象公園の抽出の考え方
 3. モデル事業を行う場所の選定について【フェーズ 2】先端モデル地域の選定の考え方

1. 高付加価値な宿泊施設及びそこで提供する宿泊体験について

【田中委員】

- ・ 国立公園はほとんど地方にあり、地方の独特な風土、自然、暮らしが包含されている。
- ・ 海士町の青山氏の話聞いて「行こう」と思った。その理由としては、宿が素晴らしい景観の中にあることに加えて、地域の方々の生活が見られる人の営みの中に場所があり、場所の拠点として宿泊施設があるという点にある。宿泊施設のサービス、景観、機能にも大きな価値があると思うが、道義付けとしての地域の関わり方や、食・文化などがセットされているところが素晴らしいと考える。
- ・ 地方の高付加価値化は宿だけではなく、総合的なものだと考えており、日本における国立公園の周辺に位置する地方自治体が提供すべきものはそこにある。もちろん宿も高付加価値に相応しいサービス・機能を提供すべきだと考えるが、それを支えるため、宿がやるのか、地域がやるのか、DMO がやるのか、役割分担がしっかりしている中での全体的な高付加価値化と、その拠点として宿を選ぶことが必要。
- ・ 特にインバウンドは、例えば飛騨高山のような地域でも、アイコンックになるような風景・文

化等を目指すわけではなく、普段の生活や自然に日本らしさを見出す方がほとんどである。宿の中においても、地方における普段の生活に価値を付け、どうプレゼンしていくかを考えることが必要。地域ごとの風土や自然、人の生活を宿でどのように提供出来るか、それらを包含してその拠点となるものが、高付加価値化な宿泊施設ではないか。

【加藤委員】

- ・ 日本の観光は団体モードから転換している時期にある。地方の多くの老舗旅館を見ていると、旅館だけで完結していたものが、地域のハブとしての役割を持つところが増えてきた。
- ・ 情報やリスク管理といったサプライチェーンや、文化・社会・歴史といったものをアクティビティに盛り込むというハブ的機能もあるが、国立公園ということを見ると「保全」に対する長期的なビジョンを持つことが重要なのではないか。それをビジターに求める姿勢も、ハブ機能として重要な点と感じる。
- ・ その中で人材が育つことも重要だと感じる。ガイドでも、ローカル人材が話をする、若い方が誇り・愛着をより持つようになる、従業員も誇りをもって働くといった「人材」に関する部分が重要であると感じる。
- ・ それらの役割はホテル・宿泊業者だけが担うことは出来ず、地域協議会等を含む地域組織との連携が重要であると感じる。また、食材がどこから来たのか、ガイドが地域の方かなど、観光活動が地域に還元されることへの意識も高まっている。それらの観点を盛り込むことも、高付加価値化においては重要と考える。

【藤木委員】

- ・ 地域のガイドが生業として長期的キャリアとして考えられる、もしくは複数の役割を担いながら持続できるモデルが作れるような、チャレンジングかつ意欲的な地域が選定出来れば、プロトタイプとして他地域にも展開出来るものとする。

【友井委員】

- ・ 国立公園利用の付加価値は「自然への造詣を深める体験」がベースにある。その中で重要なのはガイドや、アクティビティを提供する人材やソフトだと考える。
- ・ ボランティアベースで実施すると持続可能性は高まらない。教育プログラムと連携した宿泊体験を造成する等、関わる人材が高いレベルで自立して生活できるようなモデルづくりが実現できれば、ガイドを含め様々な仕事が全体として回っていくのではないか。
- ・ 一番大事なものは持続性である。どこで規制をかけるのか、どこで補助するのかのメリハリを付けることが重要。

【涌井座長】

- ・ 環境省の国立公園でやる以上、少なくともエシカルライフが重要であることは間違いない。サーキュラー、シェアリングといった点に、どれだけ特化していくかが最低限の条件である。それなくして国立公園の宿泊施設やアクティビティに対応する基準は出来ないだろう。
- ・ そういった努力が相まって宿泊料金が高くて仕方ないという自己了解に持っていけない方法を考えることが一番重要。高付加価値・ハイエンドに焦点を絞るのではなく、後ろに続いていくピラミッド型の多様な利用にこたえられるような質的なモデルを提示したい。
- ・ 日本の国立公園は絵葉書の中に飛び込んでいくのではなく、自然の中に適応した人の暮らしがあることに魅力の源泉がある。そのような宿泊施設と、絶対的な景観を持つ宿泊施設は分けて

考える必要がある。そういう面でも、多様性について検討していかなければならない。

- ・ いままでガイドについて議論されてきたが、ガイドの幅について理解を深めることが必要。ガイドは直線的であり、インタープリターは横の議論が出来るので、縦と横の軸の整理が必要。インタープリターが活躍できる素地あるいは要素と、断面的にルートを案内出来るガイドの組み合わせを体験に紐づけることが重要。

【永原委員】

- ・ 面的に国立公園を活用していくにあたって、ビジネスとしてサステナブルでないと続かない。日本の国立公園をどう伝えと海外の方が来て下さるか、という観点から、求められる宿泊施設を考えるべき。雄大な自然だけでなく、禅的なもの、日本文化にまつわることなど、日本らしい差別化要素が必要。
- ・ ネイチャーとカルチャーは別物として扱われがちだが、カルチャーがネイチャーにつながった時にこそ日本の強みが生きてくる。例えば、伝統芸能をパフォーマンスされている方や染め物をされている方などは、必ず自然への畏敬の念があり、日本人と自然の密接度合いは他国にない特徴である。ストーリーテリングという形でストーリーにのせて、ハードとソフトの両面を体験できる場所をつくることで、圧倒的な地位を築くことが出来るのではないか。

2. モデル事業を行う場所の選定について【フェーズ1】候補となる対象公園の抽出の考え方

【田中委員】

- ・ 地方自治体だけが「やりたい」と手を挙げるものは長く続かない。キーになるのは周辺の地方自治体。特に国立公園は1つの自治体だけでなく複数の市町村、県にまたがっているため、連携が出来る素地があることが重要。経済的な持続性が必要であれば、民間事業者との関わりも重要。
- ・ 今後、国が指定していくという中で、手上げ方式ではたくさん出てくると思うので、それらは避け、所定の条件を満たすエリアを環境省が選定していくべき。

【涌井座長】

- ・ 地方自治体の熱量が高いことはもちろんだが、事業を遂行する体制が確保出来るかが重要。国立公園満喫プロジェクトでは、地域協議会をつくっている。この協議会が具体的にどのような活動をしているかが一つの評価点になるかもしれない。
- ・ DMOだけでなくDMCにも足を運び、資本や経済の回し方、あるいは産業界全体でどれだけ本事業を支援するか、その構図が描けるかという点は、選定に大きく影響するのではないか。

【芹澤氏】

- ・ 「先行8公園+3公園」で共通する部分と、それぞれの特徴を出す部分は分けて考える必要がある。例えば海外における入山料・入園料等について、国立公園の中で宿泊業を運営する上では、国立公園の維持管理運営のための費用を宿泊料の中から支払うことになっている。商業ベースで我々のパートナーとなる登山やトレッキングを運営する業者も同じ。利用者も、例えば1万円のコースに入山料や維持管理のお金が14%程度入っているというのは分かっている。
- ・ 若い世代を中心に、自分が消費したお金の中に、どのような商品価値が含まれているのかという点に敏感である。特に泊まって自分が出したお金が役に立っている、貢献しているという考え方が今回のプログラムには入っており、これは泊まらないと体験出来ないものである。日帰

りでなく、泊まるというところで連携しているという点を織り込みたい。

【涌井座長】

- ・ 今のご意見は全くその通り。例えば北海道で魚釣りに行った方がヒグマに襲われるといったケースがあるように、我々が自然に入っているのであり、主体は自然である。入山料、利用料は当然の対価として払い、アプリケーションで、どこでどんな人がどのような行動をしているのかを把握できるような仕組みまで検討することが、将来重要になってくると考える。

【寺田氏】

- ・ 世界中のトラベラーと話すと、「自分達がそこにおいて暮らしているだけで負荷をかけている」ことを理解している。どうしたらそれを旅行しながらでも軽減できるのか、役に立つのか、という理解が非常に深い。日本人はその感覚が少し弱い。
- ・ 伊豆大島で経営しているカフェで話をすると、自然に対して何かしなければいけないが、何を選べばいいのか分からない、と言う声が多い。どういう宿やどういうツアーを選ぶと、より地域や自然に対して貢献出来るのかを知りたいというのは、よく聞かれる。
- ・ 一日滞在すると自分はこれだけ水を使った、これだけ電気を使った、ということが分かるのは泊まる側にとって非常に貴重である。値段設定の理由付けやバックグラウンドがわかれば、それに対しては高くても厭わない。さらに滞在中の満足度が高ければ、もっとそういう場所に泊まりたいと思うようになってくる。
- ・ アメリカやオーストラリア等では、国立公園はお金がかかる、入園するのにフィーがかかるというのは当たり前と思っている。日本でも国立公園の魅力造成とあわせて、支払ったお金が自然保全やレンジャー、ガイド、インタープリターの教育や人材、給料等に使われることが明記されるなど、払う側に価値が提示できるベースがあると良いのではないかと考える。

【藤木委員】

- ・ 例えば山から落ちる、遭難する等、自然の中でのアクティビティ・体験には危険のリスクを伴うものであり、旅行者の安全が確保されていることが前提である。自然の保護とともに運営のための保険の原理・発想を持ち込むことも含め、どの程度のお金がかかり、どのような整備が必要なのかなどの現状把握が必要。
- ・ その上で、皆さんが気持ちよく、自ら進んで負担するモデルを作り、協力関係や意欲といったものを選定基準に盛り込んでいけると良いのではないかと考える。

【涌井座長】

- ・ 「先行8公園+3公園」など、これまで議論してきた場所であればあるほど、先進的候補として絞り込んでいく議論がしやすいという理解で良いか。

【藤木委員】

- ・ 熟度がしっかりしているところはこれまでの満喫プロジェクトで扱ってきた地域に多いと思う。今までに無い所を作っていくプロジェクトになるので、挑戦資格を持っているところは自ずと限られてくるのではないかと考える。

【永原氏】

- ・ 客観的な基準に基づいて選定することは正当化しやすく、やりやすいと思う一方で、本当にサステナブルな地域を作っていくことを考えた時には、地域のプレイヤーに全てがかかっていると思う。どういった事業者がどれだけコミットしているか、他の地域にはどういった方がいる

かという観点からも見ていく必要がある。理想は「先行8公園+3公園」の考え方だと思うが、特殊事情がある場合には、その他の公園も検討に入れる余地も残した方が良いのではないかと。

【涌井座長】

- ・ マーケットの問題もある。どれだけこちらが選定しても、マーケットとしての熟度が足りない地域もあるかもしれない。そういったことも考慮しながら判断すべき。

3. モデル事業を行う場所の選定について【フェーズ2】先端モデル地域の選定の考え方

【涌井座長】

- ・ 究極の先端モデル公園の選定はどのように実施すべきか。

【田中委員】

- ・ 財源を持っている自治体あるいは環境省がどれだけ腹を括って事業者に公募を出来るかにかかっているように思う。自治体は公益性・公平性を重視するため、ピンポイントで進めることが難しい。そういった観点を排除して、腹を括って指名することが出来るか、またそれに呼応する事業者がいるか、もしくは可能性があるかといった点を見極められれば、長期的な取組につながると思う。自治体は市長が変わると変わってしまうため、事業者が経済ベースに乗せた取り組みにできるよう腹を括って最初に投資が出来るかということだと考える。

【加藤委員】

- ・ 地域にどう還元していくか、地域の好循環づくりに尽きると考えるが、経済的だけでなく、社会・人が育つ、文化の継承、国立公園・自然の保全、全ての好循環の理想像が描けると良い。
- ・ どれくらいのコミットメントをこちらから求められるのかも重要だと考える。持続可能な観光推進事業にも関わっているが、全て単年度完結の事業となってしまう。持続可能な地域づくりというものを発信している以上の、長期的なビジョンをこちらから地域・事業者側に提示し、どのくらいのコミットメントを求めるのか明確にする必要がある。

【涌井座長】

- ・ 問題はサステナビリティの考え方。環境に対する負荷のみならず、主体自身が経済的に自立出来て地域と共存できるかがサステナビリティを考える上で一番重要。これがなければ大変な負荷を与えてしまう。これまで廃屋撤去に相当な金額を使っているが、その原因は事業のサステナビリティが担保されなかった結果と考える。

【友井委員】

- ・ 先ほどの議論では、理解を深める上で、規制すべきところは規制する等、行政サイドからのオーダーを入れていくことも大事だと話した。収益とのトレードオフになるので、単純に補助をください、金銭的支援してくださいだけではなく、長期的なビジョンの中で本来あるべき事業性を越えたところをオーダーするのであれば、誰がどのように負担するのか、あわせて検討すべき。
- ・ 日本の国立公園の特性を踏まえた高付加価値な体験を提供するという意味では、自然環境保護や小規模な宿泊などの前提に立つと、規模の観点で回収することは難しい。補助の部分と事業者が負担する部分とをいかに切り分け、設計するかが重要。

【涌井座長】

- ・ レンジャーは、様々な交流の中から「この国立公園であれば熟度が高い」といった感度を持つ

ているはず。「先行 8 公園+3 公園」について、現場の意見や感覚から、さまざまなサステナビリティを担保出来そうなところをあらかじめリストアップしていただきながら、先端モデルの考え方をブラッシュアップしていくというプロセスはいかがか。

- ・ とりわけ大事なのはインバウンド対応。日本人だけではなく、外国人がその魅力をもってわざわざそこに行きたいという設えが必要。インバウンドにどのような効用があるか、ということも考えながら議論すべき。マーケットの熟度についても、少しイニシャルの投資をすれば上がっていくのか、あるいはなかなか火がつかないのか、議論を続けていくのはいかがか。

【田中委員】

- ・ コロナ禍前は高山に宿泊ベースで人口の 7 倍以上もインバウンドが来ていた。なぜ 7 倍という数字が実現出来たかは、34 年間地道な努力を続けているからである。当時、国際観光都市のモデルに国から指定され、地道に民間と一緒に取り組み続けた結果、アクセスが悪い場所に海外の方も来るようになった。今回の選定によって 20~30 年後も続くような取組が地方都市で起これば、非常にチャンスだと考える。どれだけ覚悟があってその地域がやるか、自治体だけでなく民間にも問い、20~30 年先を見越して高付加価値化のモデルになるという地域であれば、やる価値は十分にある。また、環境省が実施することが大きな後押しになると思う。

【則久国立公園課長】

- ・ 世界的に「サステナビリティ」が当たり前な中で、何をやっていくのかを考えることが重要と感じた。国立公園満喫プロジェクトは 2016 年以降の歴史があり、現場にそれをやるための所長がおり、地域のキーパーソンもいるため、まずはそこで成功モデルを作りたい。そこでやれたことが他の地域にも広がるのではないか。

【岡野国立公園利用推進室長】

- ・ インタープリテーションの重要性を多く議論いただいた。自然を満喫する上質なツーリズムに必要なものが何かという中で国立公園満喫プロジェクトを始め、ストーリー、インタープリテーション、ルール、コンテンツツアー化、といった整理をさせていただいた。現在、現場ではインタープリテーションの計画を地域でつくるような取組をはじめている。
- ・ 各地域にどのような資源があって、つなぎ合わせるとどんなテーマがあるのか、それを来訪者の関心や興味に応じてどうやって伝えるのかを整理し、必要な施設やアクティビティを地域全体で提供できることを目指して、取組を進めたい。

【松本審議官】

- ・ 20~30 年かけてやる覚悟を民間事業者、自治体、環境省でどれだけ持てるかといった点が重要と感じた。
- ・ 京都市の門川市長に 1,000 年の魅力 SDGs 都市としてのコツを伺ったところ、コツコツやることと仰っていた。今回のプロジェクトもコツコツと、地元の方々、事業者と進めていきたい。

4) その他

○事務局から事務連絡

以上